

多田作 レンギョ竿

北関東支部 遠藤和彦

淡水大魚研究会HPの掲示板を見ていたら、レンギョ竿の引き取り手を捜している人からのメールがあった。あの六角竿の名竿「多田作 レンギョ竿」である。これまで何人かの旧会員とも連絡をとり、レンギョ竿を入手しようと試みたが、いずれもNGであったので、今回の情報には私にとって、まさに晴天の霹靂(へきれき)といってもいいくらい衝撃的なニュースであった。

「多田作 レンギョ竿」とは、小西茂木初代会長がレンギョ釣りを始めた昭和30年前半には、今日のカーボンロッドのような剛性の強い適当な竿が無く、グラスファイバーが出始めたばかりであった。当時正三角形に割った国産の真竹(本ではトンキン竹となっているが実際は真竹が真相とのこと)を6本張り合わせて、先に行くに従いテーパ―をつけたもので、その頃六角竿作りでは第1人者といわれた多田一松氏の工房へ小西氏が何度となく通い、改良を重ね完成させたものである。昭和48年ごろで1本¥8,000というから、現在の価格では7~8万円はしたことと想像できる。



【多田作レンギョ竿を寄贈して頂いた大谷さん】

早速個人的に連絡をとると、リメールが直に届いた。何度かメールをやりとりしているうちに、何とその方は、私の住んでいる市に通勤されている。小西茂木生誕100年の記念の年にこうして氏の開発されたサオに会えるということは、偶然にしては出来すぎている。

何かの縁とでもいうべきものを感じざるを得ない。サオの持ち主の方のお名前は「大谷さん」という。

彼が小学校5年生の時に「淡水大魚釣り」の本を読んで、早速入手したくなり、当時東京の住まいが多田工房に近かったために毎週自転車で通ったという。多田氏は忙しし中にも当時小学生だった大谷さんにお茶を入れてくれたり、製作の説明をしてくれたりとかわいがってくれた。そこで大谷さんは、レンギョ竿を注文し、尻手環や巻糸の色などを特注した。当然に大谷さんの名前入りである。大谷さんが中学校に入る頃にサオは完成したが、その頃はやりだしたギターの虜になってしまい、結局一度も実際に使用する

ことなく今日まで保管されることになったのである。

私の自宅近くのレストランで昼食を取りながら、現品を見せていただいた。想像していた以上に太い。がっしりした作りである。サオの取っ手部のコルクに巻かれているビニール包装は納品時のまま。オリジナルの尻手や針掛けなどもついている。継ぎ手部は何度か抜き差ししているうちに接着剤が劣化し、剥がれてしまっているが、プレスによる絞りではなく、ステンレスパイプを旋盤で削りだしているところがニクイ。残念ながら、一番手もとのガイドリングは2本のサオとも割れて紛失してしまっているが十分に補修可能である。

大谷さんと当時の思い出話をしているうちに、2本とも私に差し上げるといわれるので、1本は淡水大魚研究会の資料として会に寄贈していただき、もう1本は私個人の宝物として使用させていただくことにした。大谷さん曰く、「これでこのレンギョ竿は落ち着くところに落ち着いた感じがします。」と、ありがたい言葉を贈っていただいた。このレンギョ竿で小西茂木初代会長の提唱された「ボトリと落ちる甘い音」を是非再現してみたいのである。

もうサオのガイドは入手した。お盆の頃にじっくりとサオの補修を試みようと考えている。補修後の実釣の際には、是非大谷さんにもお越し願いたい。

最後に、会の趣旨を理解していただき、気持ち良くサオを寄贈していただいた大谷さんに心より感謝申し上げます。



【ステンレスパイプ削り出しの継ぎ手に感動】



【外された接続部の補修は容易】



【40年の歳月にガイドが割れ、外れていた】



【今日では当たり前になったハリ掛け】



【ダブルロックのリールシート・ネジ部は旋盤で削りだしてある】



【多田さんから取り付けを反対されたという尻手環】



【大谷さんに感謝】